

[B年] 公現後第3主日(2022年1月23日)**【旧約聖書日課】申命記30章11～15節**

¹¹わたしが今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。¹²それは天にあるものではないから、「だれかが天に昇り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。¹³海のかなたにあるものでもないから、「だれかが海のかなたに渡り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。¹⁴御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。

¹⁵見よ、わたしは今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く。

【使徒書日課】ペトロの手紙一1章3～12節

³わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、⁴また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。⁵あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。⁶それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいるのです。今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、⁷あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたらすのです。⁸あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛

し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。⁹それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。¹⁰この救いについては、あなたがたに与えられる恵みのことをあらかじめ語った預言者たちも、探求し、注意深く調べました。¹¹預言者たちは、自分たちの内におられるキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光についてあらかじめ証しされた際、それがだれを、あるいは、どの時期を指すのか調べたのです。¹²彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたがたのためであるとの啓示を受けました。それらのことは、天から遣わされた聖霊に導かれて福音をあなたがたに告げ知らせた人たちが、今、あなたがたに告げ知らせしており、天使たちも見て確かめたいと願っているものなのです。

【福音書日課】マルコによる福音書1章21～28節

²¹一行はカファルナウムに着いた。イエスは、安息日に会堂に入って教え始められた。²²人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようではなく、権威ある者としてお教えになったからである。²³そのとき、この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ。²⁴「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」²⁵イエスが、「黙れ。この人から出て行け」とお叱りになると、²⁶汚れた霊はその人にけいれんを起こさせ、大声をあげて出て行った。²⁷人々は皆驚いて、論じ合った。「これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。」²⁸イエスの評判は、たちまちガリラヤ地方の隅々にまで広まった。

「聖書協会共同訳」（2018年版）読み比べ

申命記30章11～15節

11私が今日命じるこの戒めは、あなたにとって難しいものではなく、遠いものでもない。12それは天にあるものではないから、「誰かが私たちのために天に昇ってそれを取って来てくれるなら、それを聞いて行うことができるのだが」と言うには及ばない。13また、それは海のかなたにあるものではないから、「誰が私たちのために海のかなたに渡り、それを取って来てくれるのだろうか。そうすれば、私たちはそれを聞いて行うことができるのだが」と言うには及ばない。14その言葉はあなたのすぐ近くにあり、あなたの口に、あなたの心にあるので、あなたはそれを行うことができる。

15見よ、私は今日、あなたの前に命と幸い、死と災いを置く。

ペトロの手紙一1章3～12節

3私たちの主イエス・キリストの父なる神が、ほめたたえられますように。神は、豊かな憐れみにより、死者の中からのイエス・キリストの復活を通して、私たちを新たに生まれさせ、生ける希望を与えてくださいました。4また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、消えることのないものを受け継ぐ者としてくださいました。5あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。6それゆえ、あなたがたは大いに喜んでいますが、今しばらくの間、さまざまな試練に悩まなければならないかもしれませんが、7あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊く、イエス・キリストが現れるときに、称賛と光栄と誉れと

をもたらすのです。8あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛しており、今見てはいないのに信じており、言葉に尽くせないすばらしい喜びに溢れています。9それは、あなたがたが信仰の目標である魂の救いを得ているからです。

10この救いについては、あなたがたに与えられる恵みのことを預言した預言者たちも、熱心に尋ね、つぶさに調べました。11預言者たちは、自分たちの内におられるキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光についてあらかじめ証しした際、それがいつ、いかなる時を指すのか調べたのです。12彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたがたのためであるとの啓示を受けました。それらのことは、天から遣わされた聖霊に導かれてあなたがたに福音を告げ知らせた人たちが、今、あなたがたに告げ知らせており、天使たちも、うかがいたいと願っていることなのです。

マルコによる福音書1章21～28節

21一行はカファルナウムに着いた。そして安息日にすぐ、イエスは会堂に入って教えられた。22人々はその教えに驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者のようにお教えになったからである。23するとすぐに、この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ。24「ナザレのイエス、構わないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」25イエスが、「黙れ。この人から出て行け」とお叱りになると、26汚れた霊はその男に痙攣を起こさせ、大声を上げて出て行った。27人々は皆驚いて、論じ合った。「これは一体何事だ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。」28こうして、イエスの評判は、たちまちガリラヤ地方の隅々にまで広まった。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・1月23日「公現後第3主日」の日課主題は「宣教の開始」。旧約聖書日課は、「申命記」から、いわゆる「モアブ契約」としてモーセが告げた教えの一部。使徒書日課は、「ペトロの手紙一」から、手紙冒頭に置かれた祈願文の箇所。福音書日課は、「マルコ福音書」から、宣教の初期に主イエスが安息日の会堂で教えられた様子を伝える箇所。

旧約日課(申命記 30章より)

・「申命記」は、ヘブライ語正典「律法」の第五巻として置かれ、正典「律法」を正典「預言者」(「ヨシュア記」以下)と結びつける位置づけを与えられている文書。「出エジプト記」から始まる「モーセの出エジプト物語」の完結部を構成するが、そのほとんどは死期を迎えたモーセが「出エジプト」以来のイスラエルの民の旅を振り返りながら、授与されてきた「律法」の教えを再度語り直すという形式の「訣別説教」の様式を取っている。その内容は、基本的に「シナイ(ホレブ)契約」の再確認であるが、日課箇所を含む29章以下は「モアブ契約」として構成されている。

・「モアブの地(平野)」は、四十年の荒れ野の旅を終えたイスラエルの民が、モーセからヨシュアへの指導者の交代を経験した場として設定されており、ヨシュアの下でヨルダン川を渡って行く直前に滞在していたヨルダン川東岸域を指している。一方、「出エジプト物語」の中でも「荒れ野」の出来事として、イスラエルの民が「モアブ」の地を通過しようとした際にモアブ王バラクは預言者バラムにイスラエルを呪わせようとした(民 22~24章)、といった逸話が伝えられている。「モアブ」と「イスラエル」の関係は不安定で、「申命記」は、「モアブ人」をイスラエルの民が領地を通過することを許可してくれた恩人として描きながら(申 2:8以下)、一方で「アンモン人」と並んで「主の会衆」に決して加わることでできない人々とも規定している(申 23:4以下)。正典「律法」は「創世記」で、「モアブ人」の出自をアブラハムの甥ロトが実の娘との間にもうけた子の子孫として描いており、「イスラエル十二部族」との近親性を示唆しているが、「列王記」の伝える王国時代には、南王国の支配下にあった一時期を除いて独立した隣国として常に煩いの種であったことも示唆されている。このように複雑な関係性を持つ「モアブ」の地でイスラエルが神から(第二の)契約を与えられたと「申命記」が告げるのは、モーセの後継者としてヨシュアが立てられたことを、この「モアブ契約」の中に位置づけるためであろう。

・「モアブ契約」の主旨は、もっぱら神の「御言葉」の近さの確認と、「御言葉」に留まるようにとの励ましにある。それは、「申命記」が立脚する神学に沿っており、28章までの「シナイ契約」も同様の立場から再解釈されていると言える。

使徒書日課(Ⅰペトロ1章より)

・「ペトロの手紙一」は、新約使徒書中、「公同書簡」(「ヘブライ人への手紙」から「ユダの手紙」まで)として区分されてきた文書の一つ。使徒ペトロの名によって書かれ、アナトリア半島の諸教会に宛てられている。近代以降の聖書学者の多くは、本書簡の著者が本当にペトロ自身であるのかという点について疑義を呈している。本書簡は、末尾で、実際の執筆が「シルワノ」によってなされたことが明示され、「マルコ」も事実上の共同執筆者として名が挙げられている(5:12以下)。「シルワノ」は、「パウロ書簡」でも共同執筆者として名が挙げられている人物で(Ⅰテサ、Ⅱテサ、Ⅱコリ 1:19も参照)、「使徒言行録」でパウロ宣教団に加わった人物として伝えられる「シラス」と同一人物ではないかとも考えられている。「マルコ」は、「使徒言行録」でバルナバが宣教団に加えていた「ヨハネ=マルコ」のことと考えられ、後にペトロの宣教旅行に随行して専属通訳の役割を果たしたとの伝承がある。本書簡は、著者(ペトロ)が「バビロン」滞在中に執筆したものとされているが(5:13)、この「バビロン」は「ローマ」を指す隠語ではないかと考えられている。ただし、1世紀のバビロニア地方には一定のユダヤ人コミュニティが根付いて活動していたことも知られている。

・本書簡は、キリスト者が迫害に晒されていることを示唆する記述を含むが、ペトロがネロ皇帝の迫害で殉教したとされる頃(67年ごろ)までキリスト者が当局から組織的な迫害を受けていたことは知られておらず、あったとすれば、ユダヤ教教会の中での対立、あるいは教会内での対立に伴う迫害に留まっていたと考えられている。ローマ社会においてキリスト者が組織的な迫害を受けるようになったのは、ドミティアヌス帝(在位=81~96年)の時代になってからと考えられており、本書簡の執筆時期をこの時代まで引き下げるべきと考える聖書学者もいる。しかし、本書簡で執筆者ペトロが繰り返し主張しているのは、キリストが苦難を受けられた方であり、その苦難(十字架)によって自分たちが救われたのであれば、まだ救われていない多くの人々が救われるために、キリストと結びつけられた自分たちキリスト者がキリストと同様の苦難や試練を引き受けるのは当然であり、それがキリスト者としての存在意義である、ということ。使徒たちの時代(30~60年代)は、ローマ帝国内にあって、また隣国パルティア王国内(特にバビロニア地方)にあって、ユダヤ人社会が迫害を受けることが繰り返し起こっており、著者がキリスト者を狙い撃ちにした迫害を切迫したものとして考えていないとしても、いずれその刃が自分たちに向かってくることを想定するのは当然であったと推認される。むしろ、そのような「将来に想定される迫害」に備えるために、平穏な状況にあるうちに備えるべきことがあると教えられたのが主イエスであり、それを踏襲した教えとして本書簡を受けとめることもできる。

福音書日課(マルコ 1 章より)

・日課箇所は、主イエスが宣教の初めに四人の漁師たちを弟子として従わせられたことに続いて描かれる、会堂で教えられたときの人々の反応を伝える逸話。共観福音書中、「ルカ福音書」は並行記事を伝えているが、「マタイ福音書」は伝えていない。

・場面が「カファルナウム」として設定されているが、直前の漁師たちを従わせられた逸話の場面も、「ガリラヤ湖のほとり」であり(1:16)、「シモンとアンデレの家」はカファルナウムにあったとされている(1:29)。カファルナウムは、ガリラヤ湖北岸に位置する町で、前 2 世紀にユダヤ人王朝として成立したハスモン王朝(マカベア朝)によって建設され、ローマ帝国時代には、ローマ軍団も駐屯する重要な都市となっていた。ガリラヤ湖を漁場とする漁港の町で、水産加工場もあったことが知られており、交易によって経済的にも豊かであったと推認されている。四人の漁師たちの漁業者としての背景が明確に「カファルナウム」とされて語られるのは、このような事情が知られていたからだろう。この「カファルナウム」が主イエスのガリラヤ宣教の拠点であり、この町に構えていたシモン=ペトロの家が事実上主イエスの活動基地になっていたと考えられる。

・日課箇所は、主イエスのカファルナウムでの活動が、安息日の会堂礼拝に参加して教えることと、そこにいた「汚れた霊に取りつかれた男」から「汚れた霊」を追い出すことにあったとしており、非常に示唆的である。この二つのことは別個のこととして物語られているわけではなく、「権威ある者としてお教えになった」ことが、「汚れた霊」を顕わにさせ、「汚れた霊」との対峙と追放という一連の出来事に続いたものとされている。そして、この出来事こそが人々を驚かすことであったと、福音書は描いている。つまり、福音書記者は、主イエスの宣教活動の中心に置かれていたことが、「会堂礼拝を真実のものとして回復すること」にあったということを示そうとしているのだろう。

・主イエスの「正体」を「神の聖者」と見抜いたのが「汚れた霊」であったという描き方は、聖書学者らによって「マルコ福音書」記者の意図する「メシアの秘密」論として解釈されてきた。これは、主イエスがご自身の正体を、弟子たちに対しては敢えて隠されていた、という見方であるが、「福音書」記者が描くのはむしろ、弟子たち・人々の神の真実に対する無理解であろう。

来週の誕生日 (1 月 23 日～29 日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-6 番「つくりぬしを賛美します」(= I 79「ほめたたえよ、つくりぬしを」)は、もともと 17 世紀のオランダ独立戦争の最中に愛唱された愛国歌であったものが米国の収穫感謝祭の歌として英訳され(「We gather together」)歌われてきた讃美歌だったが、

歌詞が愛国的すぎるとの批判から、長老教会の信徒 J・コリーが新しい歌詞を創作し生まれた。

- ・21-280 番「馬槽のなかに」(= I 121)は、20 世紀日本を代表する讃美歌学者であった牧師・由木康の代表作。初期に、「イエスの神性はその人性のうちに包まれ、それを通して輝いている」との神学的確信を得たことに基づいて著した詩を、1931 年版『讃美歌』で歌詞として採用。曲は、由木と同時代に東北学院、明治学院等で教鞭を執った教会音楽家・安部正義の作。
- ・21-430 番「とびらの外に」(= I 240「とぞせる門を」)は、19 世紀英国の著名な讃美歌作家ウィリアム・W. ハウが黙示録 3:20 に基づいて作詞。『讃美歌 21』では全面的に改訳されている。

21-6「つくりぬしを賛美します」***Wilt heden nu treden voor God den Heere***

1. Wilt heden nu treden voor God, den Heere, / Hem boven al loven van harte zeer, / En maken groot zijns lieven namens eere, / Die daar nu onzen vijand slaat terneer.
2. Ter eeren ons Heeren wilt al uw dagen / Dit wonder bijzonder gedenken toch. / Maakt u, o mensch, voor God steeds wel te dragen, / Doet ieder recht en wacht u voor bedrog!
3. Bidt, wakent en maket, dat g'in bekoring / En 't kwade met schade toch niet en valt. / Uw vroomheid brengt den vijand tot verstoring, / Al waar' zijn rijk nog eens zoo sterk bewald!
(Nederlandsche Gedenckclanck, Haarlem, 1626)

English version by J.C.Cory

1. We praise Thee, O God, our Redeemer, Creator! / In grateful devotion our tribute we bring; / We lay it before Thee, we kneel and adore Thee; / We bless Thy holy name; glad praises we sing.
2. We worship Thee, God of our fathers; we bless Thee; / Through life's storm and tempest our Guide hast Thou been; / When perils o'ertake us, escape Thou wilt make us, / And with Thy help, O Lord, our battles we win.
3. With voices united our praises we offer; / To Thee, great Jehovah, glad anthems we raise. / Thy strong arm will guide us, our God is beside us, / To Thee, our great Redeemer, forever be praise.

21-430「とびらの外に」***O Jesus, Thou art standing***

1. O Jesus, thou art standing / outside the fast-closed door, / in lowly patience waiting / to pass the threshold o'er: / shame on us, Christian brothers, / his name and sign who bear, / O shame, thrice shame upon us, / to keep him standing there!
2. O Jesus, thou art knocking; / and lo, that hand is scarred, / and thorns thy brow encircle, / and tears thy face have marred: / O love that passeth knowledge, / so patiently to wait! / O sin that hath no equal, / so fast to bar the gate!
3. O Jesus, thou art pleading / in accents meek and low, / "I died for you, my children, / and will ye treat me so?" / O Lord, with shame and sorrow / we open now the door; / dear Savior, enter, enter, / and leave us nevermore.